

今の子どもたちに言いたいのは、守山女子があつたから今があるということや。守山を大事にせなあかんで、と私は一番言いたい。

語り手 松井健（高校一期生第一学年主任） 聞き手 北所千咲

*

松井先生の経歴と守山女子の伝統を受け継ぐ学校づくり

―初めに松井先生のご経歴をお願いします。

大学出た後、滋賀県の公立学校に行つてまして、ちょうど二〇〇六年に立命館守山が開校するでしょ。その時に立命館に入職しました。転職して立命館に来て、最初の学年主任をさせていただいて、その次、「教頭やれ」って言われて教頭やつて。で「一貫教育部に行け」と言われて行つて。その後、北海道慶祥に二年行つて、そして「立守」に戻つてきた。

公立学校の際に結構色んな職種をやらせてもらったんですよ。ただ小學校だけはしてなかったのよ。だから、ぜひ小學校も経験したいなと思つて、「立守」で定年後、立命館小學校に行つたんです。立命館小學校で継続雇用として一年だけ働いて、それで他にやりたいこともあつて、そこで辞めちゃおうと思つたのね。退職届出したんだけど、人事課で退職届を見た一貫教育部長に「ちよつと仕事手伝ってくれ」と言われて、一貫教育部に移つて今に至ると。そして、あなたと今お話をしている、というわけです。

―なるほど。ありがとうございます。松井先生が教師を目指されたきっかけは何ですか。

きっかけ。ありきたりのことを言うと、高校時代の教員の影響。今も

なお、自分の目標であり続けている恩師の影響です。で、二つ目にネガティブに言うと、他に「やりたいな」と思うことはなかった。ポジティブに言うと、とにかく教員をやりたいと思つた。それが大きな二つの理由ですね。

―開校当時に学校づくりに関わる中で、一番大変だったことはありますか？

ちょうど私が滋賀県の公立学校の最後の勤務先が守山だったんですよ。守山にある公立学校にいたんです。そこで、教職員組合の仕事をしていたのね。書記長をしていたので、ある団体から署名をしてくれて頼まれるわけです。何の署名かつて尋ねたら、「守山市民の会」が立命館に反対してる、っていう内容でした。

―ええ？

立命館が守山に来るなんてどういうことだ、っていう反対。簡単に言うと、守山市と平安女学院という法人と立命館の三者の中で色々な事があつて、守山市から立命館に学校の設置者が移管することになったんですよ。だけど、市民は反対。もちろん賛成した人もいるんだろうけど、反対の声が多かつたのね。つまり「立命館」だから、つて思うかもしれないけど、出発点は、地域が愛した大事な学校、「守山女子」なんです。明治時代の裁縫の学校からスタートしていて、そういう意味では守山市に根付いていた学校なんです。その学校が立命館に身売りをするみたいなことで、すごく反対があつた。

そんなことを事前に分かつていたから、いかに地域の人に信頼されるか、立命館の生徒さんがここに来てよかつたと思つてもらえるような学校をまず創らないとダメだなんて思つたんですよ。地域に愛されること。それが、子どもたちが立命館守山という学校でのびのびやつていけ

るための条件の一つかなと思って。地域とどううまく折り合いをつけていくか、っていうのはまず一つ目の課題でした。

*

守山女子と立命館守山

これも全国初のことなんだけれど、公立の女子高校から私学の男女共学に移っていくわけです。「設置者移管」って言うんですね。日本初のことなんです。誰もノウハウを持ってない。そんな中で当時は六クラスやから、二四〇名か。四〇名定員の六クラスやからね。二四〇名の生徒を預かり、なおかつ、入学した段階では、上に守山女子高校二年生、三年生がいるんです。

—そうだったんですか。

そこからスタートしたんですよ。だから、地域にも愛されなあんし、守山女子高校で入学した生徒さんたちにも愛されなあんし。更に、学校全体が立命館守山ってなったんだから、高校二年生も高校三年生も、みんなやっぱり立命館の生徒さんとして育ててほしいし……。一言で言うと、みんなが上手くやってほしい、それが願いでした。

それに、当時は学年主任だから、授業もあるでしょ。守山女子の子たちにも、週に二時間教えに行っただけです。当時の守山女子高校で入学した高校二年生三年生とそれから立命館守山の高校一年生では教育課程は違っただけです。けど生活指導は同じ規則でした。

—なるほど。それは立命館守山の方に合わせてるんですか？

守山女子に合わせてる。

—立命館と守山女子では内容も違っただけですか。

そうそう。高校一年生の立命館の生徒が七限目授業とか、土曜日の登校日とかある。だけど、守山女子で入学した二年生三年生は、六限目終

わったら放課後のクラブに行ったりとか、帰ったりとかいうような時代がずっとあって。だから一年目は、もうこうしたいという理想はあるんだけど、他の附属の長岡京とか宇治とか慶祥にはない「立命館守山」っていうのを作りたい、っていうそんな思いだったんだけど、現実はやっぱ守山市や守山女子の生徒のことも配慮しないとダメだという、物凄く難しかったし、プレッシャーもあったなー、っていうことなんです。

*

当初の学校全体の方針

—教頭先生になられて、学校全体の方針を決める上で大切にしていた価値観はありますか？

私はあんまり対立は好きじゃないんですよ。そして、当時は守山市で採用された教員、滋賀県で採用された教員が混在していました。だから、上手く教職員みんなが角立つことなく上手くやりくりしてもらうために、どうしても良いかなということを考えていました。教員たちが最後まで気持ちよく働いていただけるようにするというようなこともちよつと考えてましたね。

—他の学校とは違う立命館守山らしさとは何でしたか？

昔は、全てがきちつとしていました。もう立命館にはないぐらい。昔はね、大学学部入学前に、各附属校の生徒を一斉に集めたんですよ。宇治、長岡、守山の子たちを集めて大学入学前のオリエンテーションをするんです。で、一番きちつとできるのが守山です。服装もビシツとして、挨拶もして、きちつと話を最後まで聞かされる。今なら全然考えられないでしょ。

—そうですね（笑）。

だから、自己管理ができていたから、そういう意味では大学行っても、そんなにむちゃくちゃなことをする子達はなかったと思います。TPOって分かるよね。やっぱり、時や場所をわきまえた社会性みたいなが必要でしょ。そういう基本的なことがあった上で「自由」っていうのは成り立つんだと思う。それが一つの、やっぱり当時と今の大きな違い。

—なるほど。

あなたみたいに、雰囲気の良い学生さんがいっぱい増えてくれることが、もう私の望み。

*

当初の立命館守山と今の立命館守山

—先生は二〇一五年に、もう一度立命館守山に戻られたと思うのですが、復帰後数年間で、改めて立命館守山ってこういう学校だなんて思ったこととか、当時の雰囲気とかがあれば教えてほしいです。

これはね、私の独りよがりの思いなのかわからんけども、開校間もないときは、みんながすごく何かに挑戦、挑戦って、とにかくわーっていう、そういう雰囲気になったんですね。やらざるを得ない時代だったんだけど。でも帰ってきてね、開校当初の熱い勢いというものがないと、すごく感じた。特に教職員の中に、なんか「何の為に君は立命館で働いているんだ」っていう、そんなことを問いたくないような教員もいたし。そういう意味では、ちよつと当時との温度差が違いすぎて、最初は戸惑いました。今の立命館守山は、ものすごくフレキシブルらしいよね。いい言葉を使うと、「自分で判断しなさい」っていう、そういう生活指導でしょ。服装にしても、頭髮にしてもね。当時は守山女子っていうのは、ビシッと生活指導してたから、スカート丈もパチンって決ま

ってたの。髪の毛の色もそう。服装点検は一ヶ月に一回あるんだけど、爪見て長いとその場で切るんですよ。

—ええ！

立命館やという思いで入ってきた高校一年生の子たちは、「立命館だからもつと『自由』や」って思ってたのね。思ってたのに、そういうふうにビシッと生活指導あるもんだから、子どもたちもしんどかったんやと思う。しんどかったけど、でも地域に愛されなあかんし、守山市あってこそその立命館守山やと思ったからね。そうすると、そういう生活指導も当然のことやから、大事にしていかなあかん、地元に愛されようと思つたら、そういうことをしてなあかん、っていうのがあったの。

週一回、学年の担任団の会議やって、どういうふうに学校作りしていくかっていうのを、ずっと話し合うんだけど、担任さんは担任さんで、いろんな思いがあるわけ。担任も、いろんなバックグラウンドを持った担任なんです。そんな中で、立命館に対する思いも温度差がある中で、じゃあどんなリズム感で盛り上げていきますかっていうね。最初は、すごくやっぱり時間がかかった。

今は教員は「働き方改革」で守られてるけれども。昔はもう普通に会議をずつとやったりして。帰宅が次の日になったこともしばしば。だからそういうやっぱり何とも言えん時代、みんなが熱いものを持って、激論しながら学校づくりをしていた。そんな時代でした。

—そうだったんですね。そんな中で、守山女子の生徒さんと立命館守山の生徒さんは、深く関わったり、仲良くすることは出来たのですか。

ええ質問やね。最初の四月なんか、すごい現象があつて、入学式はもう立命館だけの入学式なんです。翌日、始業式の日登校してくるでしょ。そしたら、今までは女子ばかりやったから、男子って珍しい。そ

れこそ、ベランダから覗いたりするわけや。近所からは、男子学生への苦情もあつて、すごく心配だった。こっちは気遣ひしたりして。

そんなふうにして一学期過ごして、二学期に、子どもたち、やっぱりすごいなと思ったのは、文化祭の時に、守山女子の子たちが、立命館の子たちの発表の時に、「リッツ！リッツ！」と立命館コールをしたんですよ。

—えー、すごい。

すごいでしょ。すごくね、嬉しかった。コールして、わーって、みんなで盛り上がりたつてくれたんですよ。この時には子ども達ってすごいなと思つて。そんなにくつかの場面を見て、我々が心配するまでもない。子どもらの中で考えながらね、やつてくれるんやなつて。

—文化祭は、中高全員で、今みたいな感じでやつてたんですか？

そう。文化祭は「あすなる祭」っていう名前で、もうその当時から、あすなる祭。これは守山女子高校の名称だから、ネーミングをそのまま引き継いでる。体育の時「立守ダンス」してるでしょ。

—はい、してます。

あれも守山女子高校発祥のダンスですよ。

—え！ そうなんですか。知らなかったです。

そうやで。だから今の子たちに言いたいののはね、守山女子高校があったから今があるんやと。立命館の力だけで勝手に成長したように思うなよと。だから、守山を大事にせなあかんやつて、私は一番言いたい。それは生徒だけじゃなくて、教員にも言いたいんですよ。当時の守山市も、むちゃくちゃ苦労したんです。地域の人たちもそうだし、そうやって反対の運動もしたり、とにかく守山女子を何とかしたいっていう思いから出来上がった学校やから、もっと守山市のことも、きちつと想像力

を働かせておきなさいよ、っていうのが一番言いたいですね。

＊

附属校・提携校

—立命館の大学に進学できる提携校は、何の関わりがあつて出来たのですか。

そうだよ。疑問に思うよね。それは理由があつて、立命館の戦略のすごいところで。やがて十八歳人口は減少するぞ、っていうことを、もう一九九〇年代初頭にデータのにも分析をしてね。その頃に、立ち行くような大学を作らなければならないという議論があつて、そして二〇〇〇年とかになつて。最初は長岡京（当時は深草）にしか立命館中高の附属校がなかったけど、一九九五年以降、宇治とか慶祥、そういうふうに附属校を増やしていきました。

附属校を増やすという事は、大学の学生数の確保につながりますね。そうするためには、人事政策とか、いろんな経費とかもかかるので、もう少し経費がかからない、尚且つ戦略的に考えられないか、ということ考えたのが、提携校政策なんです。

たとえば、グローバルな生徒を育てましようとなつて提携校を作ります、そこに接続コースを作りました、あるいは、理系に強い学校から理系人材を育てよう、ということなんですよ。そういうふうにして、各附属校、提携校を作った理由って、一応あるんです。学園の中で、将来を見据えて作ったのです。

＊

理想の立命館守山

—生徒たちにとって、立命館守山はどんな場所であつてほしいと感じますか？

常に誇りをもってもらえるような場であってほしい。立命館守山の出身です、って堂々と胸を張っていきけるような学校であってほしいな—って思うね。色んな分野で活躍する生徒が出てくることで、自分たちの母校愛につながっていいほしい。

—そうですね。

組織って、どんどん変わっていかないとダメだけど、最初に言ったように、私はやっぱり一期生の立ち上げから関わっているから、あの頃の、混沌とした状況の中でやってきたからね。次から次へ変わっていくのは、組織の常識なんです。それはもう当然なんだけど。大事にしてきたものも変わってしまうのを目にしてしまうと、すごく辛いので、一切、目にしないでおこうと思って(笑)。

—そうだったんですね。

でも、時々情報が入ってくる。やっぱり、ものすごく自由にさせてるみたいやで、っていう。ある意味、「自由」はとても大事なんだけどその「自由」ってちゃんと語れますかって。「自由」って何？ って問いかけた時に、ちゃんと生徒が語れるのかって、その「自由」について。—多分それは難しいですね。

難しいでしょ。それは大人が語れないから。教員が語れないのに、そんなことをやるから、子供たちは戸惑っちゃう。本当の自由っていうのは、ものすごく責任を伴う自由でしょ。自分が髪の毛ピンク色に染めて、パン・パラパンのスカート履いて登校する、それは自由でしょって。

本当にそれ、自由なのって。一高校の組織の中でそれって本当に自由なんですか、っていう議論をして、その上で今の在り方があったらいいけど、そんな議論、全部抜きにしてやっているじゃない、と私は思う。だから、もうそれは辛いって思うし、そういう意味では、当時と今と何

が違うかというところ、やっぱりそこでしょう。それはもうはっきりしてる。そこが違うというのは、やっぱり何を大事に、まずやるべきなのかっていうところが違うと思う。

—確かに、そうですね。

歯止めが利かなくなつて、とんでもない時が来た時に、どうやって生徒に問いかけるの？ そこまで腹くくってやってる？ っていうのを、教員に聞きたい。という風に、私は思うんですね。

—私も、不安な声とかは結構聞いたりします。こういう声ってとても大事ですけどそれを組織化するっていうことは難しいですね。一回変わってしまったものは、変えにくいです。

おっしゃる通り。難しい。一度緩んでしまうと、元に戻ることは、ほぼ無理です。

*

一期生への思いと感謝の気持ち

—一期生が卒業していくときは、どんな思いでしたか？

これね、もうね、悔しい。何が悔しいか言うと、自分が引き受けた学年だから、卒業もさせたかったんですね。一年生、二年生、で、最後も学年主任やと思ってたら、急に「教頭やれ」って言われて、「えーなんでや—」って。

でも、それ理由があつて。当時の教頭が守山女子の教頭やったんです。立命館守山は一年目。二年目は、守山市で採用された守山女子高校の教頭先生でした。で、その守山女子の教頭先生が、三年目に守山市に帰ることになって、守山市に帰りはります。で、次の教頭は誰や、立命館から出さなあかんやろつ、っていうことで、私に「やってください」って言われて(笑)。悔しい。だから本当は、学年主任として一期生を卒

業させたかった。とつてもそれが心残り。むちゃくちゃや今でも心残り。
― 一期生に伝えたい思いはありますか。

あのね、是非ね、私、最後にしやべっておきたいなと思ったのがあつてね。一期生の子どもたちが、最後、高校三年で、私、教頭だったにもかかわらず、彼ら彼女たちが、卒業式前やったかな、「先生、来て」って言つて、市民ホールに呼んで、全員、担任も含めて、子どもたちが、お別れ会みたいなのをしてくれたのかな。その時にね、私たちを前に並べて、当時、あの時流行つてた、ゆずのオリンピックの歌、ありますよね。『栄光の架橋』あれを歌ってくれて。「誰にも見せない、泪があつた、人知れず流した泪があつた……」この歌が、バースと流れた途端に、ブワースと涙が出ましたよ。この子たち、ちゃんと分かってくれたのかな。歌で返してくれたんかな、っていう。やつぱり、独りよがりかもしれないけども、通じたんだと思います。

だから、今、一期生の子たち、生徒、保護者に、もし言えるとしたら、「本当にありがとうございました!!」と言いたい。もうそれだけで、生徒もよく頑張つて、保護者も本当によく耐えてくれたねって。だって、高い授業料払っているにも関わらず、カフェもないし、学食もないし。校舎もほんまに古く、教室も狭いし、雪が入ってくるし(笑)。そんなところで一年間、頑張ってくれた生徒にも、保護者にも、ほんまに申し訳ない。そういう頑張りがあつて、一年後に、今の三宅町に新校舎ができる。

新設校ならではの苦労や混乱っていうのは、これに尽きるんだけどね。だから、すごいことを経験させてもらったわ。そういう歴史があつて、今の皆さんがある。それがなければ大阪とか京都とか岐阜など、いろいろな地域から通ってきてくれないし。だから、すごく、そういう意

味では、頑張つてよかったな、という風に思いますね。

*

― 開校当時からの貴重なお話を沢山聞かせていただいて、本当にありがとうございました。ありがとうございました。

いえいえ。とんでもないです。

― 最後にお写真お願いしてもいいですか。

(写真撮影)

― ありがとうございます。

こちらこそ、ありがとうございます。

【感想】

松井先生のお話を伺つて、立命館守山の歩みが、単に新しい学校の始まりではなく、「守山女子」という地域に根づいた伝統を受け継ぐ「挑戦」だったことを、強く感じました。地域の信頼や、生徒たちへの思いを大切にしながら学校づくりをされてきた先生のお話から、今の立命館守山があることの重みを、改めて考えさせられました。



左：語り手 松井 健さん
右：聞き手 北所 千咲